せかいの　ちゅうしんで　あいを　さけんだ！▼

ポケモン再熱

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ユウリは　めのまえが　まっくらに　なった！▼

目　次

第一話：ジムリーダーにインタビュー！　新チャンピオン　ユウリについて！　――――――――――――――――――――――――――――――――1
第二話：ユウリ、新たな目覚め！　――――――――――――――――――――――――――――――――5
第三話：目指せユウリ！　大いなる目標！　――――――――――――――――――――――――――――――――9

第一話：ジムリーダーにインタビュー！　新チャンピオン　ユウリについて！

――その時、世界が揺らいだ。

『……あ、あ～～～っと‼？　遂に、遂に決まった～～～‼？』

総括すると、息を呑む戦いであった。

鳴り止まない歓声が会場を震わせる。技と技の応酬は目を。ポケモンの雄叫び、トレーナーの掛け声は耳を。研ぎ澄まされた連携は心を。その一戦は正にポケモンバトルの極地であり、同時に人とポケモンの垣根を超えた意地と意地のぶつかり合いであった――。

これまでにも数々の名勝負を生み出してきたガラル最強を決めるジムチャレンジ。これには一つジンクスがある。それはチャンピオン決定戦にまで残ったジムチャレンジャーは必ずチャンピオンになるというものだ。

シムチャレンジは過酷である。これはガラルに住む者ならば常識とされていることだ。毎年数百名の選ばれしジムチャレンジャーがトップリーグのジムリーダー達に挑み、セミファイナルトーナメントへの資格を掴み取るために各地を奔走する。しかし毎年そこまで勝ち抜くことができるのは片手で数えられる程度である。

各ジムリーダーはその間、ジムチャレンジャー達の壁であると共に力量を測る試金石の役割を果たす。そのため手加減しており、万全の状態からは何枚も劣っている。しかし、上記の通り、それでも全く勝ち抜けることができないのはひとえに彼らの研鑽の賜物である。

〝ジムリーダー〟。その肩書きは途方なく重い。故にその薄れない実力に人々は称賛し、打ち負かしていく限られたシムチャレンジャーには激励を送るのだ。

だが、いくらセミファイナルトーナメントへ出場を決め、勝ち抜こうがその先は本気のジムリーダー達が待つ決勝トーナメントである。

彼らもチャンピオンを目指しているために容赦は微塵もない。その年の最強のジムチャレンジャーだろうが初戦で蹴散らすのが常である。

歴史を振り返ってみても初戦を突破することができたのはローズ前委員長を含め僅かに十数名。その内チャンピオン決定戦に進めたのはマスタードとダンデの二人のみであった。そして、そのどちらもが伝説のチャンピオンとしてガラルを牽引してきた。この二人が成した偉業。そこからジンクスはできたのだ。

【無敵のチャンピオン】ダンデ　ｖｓ　【新たな英雄】ユウリ

ジンクス通り新たなチャンピオン誕生に期待する者。無敵のチャンピオンが自らジンクスを粉砕し、その無敵に更に箔がつくことを期待する者。ジンクス関係なく両者どちらかを応援する者。ファンだから――、可愛かったから――、かっこよかったから――、新たな時代をみたかったから――。

様々な理由、様々な場所から人々は見守った。そして確信していた、どちらが勝とうとも、そこから新たな伝説が幕開けることを。

そして訪れた決着の時に、人々は歓声を両者に浴びせながら涙していた――。

――――

――新チャンピオンについて

ヤロー氏

『んー、そうだねぇ。初めてバトルした時からなんか違うなって感じたんだわ。もしかしたら勝ち上がってくるかもしれんて思ったけど、

ぼくには人を見る目もあったんかな』

ルリナ氏

『不思議な子、だったかな。初めて会ったのは灯台で……の筈なんけどぐいぐいきたのよ。好きなポケモンはなんですか、好きな食べ物はなんですかって。あんなに眩しい笑顔を向けられると悪い気はしないから教えたけど……。

でもバトルになるとその笑顔が違うものになった気がしたわ』

カブ氏

『元気がとてもよろしい炎のような子だったよ。ユウリくんとのバトルは心が躍る、負けるのは悔しいが、それでも清々しい。もちろん負けっぱなしのつもりはないけどね』

サイトウ氏

『芯のある方だと思います。どこまでも真っ直ぐに進み、踏破する。人やポケモンに好かれるのはああいう方だと感じました』

――サイトウさんはチャンピオンに好意があるのですか？

『彼女は越えるべき壁です』

――そうですか。仲睦まじくケーキを食べていたと垂れ込みとその写真が

ビート氏

『彼女ほどぼくの人生をめちゃくちゃにした人は他にいませんよ。その癖に彼女にはその自覚がありません。ふん、顔を見たくもありませんね。……なのに……』

――はい？

『なのに……！　なのに！　なのになのになのにッ‼？　どうして彼女はぼくに構うんですッ‼？　エキシビションマッチをするから来い？　用意周到にばあさんに連絡してまでッ‼？　オカマっぽくなった？　誰のせいだとおもてるんですッッ‼？‼？』

マクワ氏

『ぼくはビートくんやマリィちゃんがくるまではジムリーダー歴が一番浅かったんですけど、それでもバトルして一番印象に残ってるのは彼女ですね。タイプ相性を機転でひっくり返し、逆に追い込む。初めての経験でしたよ』

マリィ氏

『あの子に勝つのはあたしやけん。ジムチャレンジの頃からのライバルやし。あの子がどんだけ先に進んでても絶対に追いつく、じゃなきゃライバルって胸はれんもん！　そんでマリィのいいとこみんなに見せて街を盛り上げるけんね！』

キバナ氏

『ダンデとチャンピオン賭けて勝負できなくなったのは残念だ。まぁ、それはそれだ。そんなもん関係なしにアイツには勝ちてぇしな。そんで嬢ちゃんにも勝つ！　アイツと嬢ちゃんはバトルしてる時の表情が激似だからな！』

――以上でインタビューを終了します

第二話：ユウリ、新たな目覚め！

そこで私が見たものは……いや、私が生きていたあの世界はなんだったのだろうか。

地名は全く聞いたことがないものばかりだったし、文字も読めるし書けたけど全く見たことがなかった。それに、ポケモンもいなかった。けどその時の私は特に何も思わずその世界を生きていたんだ、間違いなく。物心がついてから……死ぬまでの二十年間を。

誰かの記憶を覗き見したとかじゃない。

転んだ時の痛みは現実だった。

悲しくて泣いた時の涙は温かかった。

嬉しくて喜んだ時の興奮は熱かった。

人肌の温もりも、人が死ぬゆく瞬間の冷たさも、私の手に残っているのだから。

私の名前は悠里。男の子だった。

ポケモンがいないあの世界で、ゲームとして存在していたポケモンをプレイしていた、只の男の子だった――。

――――

「ファイニィィィ！」

「ヒュアアァァァン！」

「チラッ！　チラチー！」

みんなの声が聞こえる。なんか久しぶりだなぁ……。

酷く焦ってるけど、どうしたのかな……。

そういえば私何してたんだっけ……？

ビートくんを弄って、マリィちゃんとショッピングして、サイトウさんとケーキ食べて……あれ、これ一週間前だったかな。

えと……あ、そうだ、ヨロイじまに来てたんだっけ。それで……確か修行のために鍛錬平原に行って転んで……。
あっ。私転んだんだ。すっごく痛かったなぁ……ん？　ちょっと待って。そこから記憶があの世界に飛んでるけど、もしかして私気を失ってたのかな。
じゃあ、そっかぁ。私を心配してくれてるんだね。
ごめんね、みんな。
「……ぅが……」
「サーナイッ!?」
「フィア!?」
「コーン!?」
あれれ？　声が出な……いてててててッ!!!!
あ、頭がぁぁあああ!!!!　痛いぃいいいいいい!!!!
目の前が真っ赤だッ！　あ、あの石かッ！　あの石が私のぉぉおお!!!!
あっ。
ユウリは　めのまえが　まっくらに　なった！

『――速報です。今日未明、チャンピオンがヨロイじま鍛錬平原にて転倒し、意識不明。現在搬送先の病院にて入院中とのことです』
私の不注意が原因とはいえ、随分大事になっちゃったなぁ。
ママにはすっごく怒られて心配されたし。……目覚めて初めに見た顔がママの泣きそうな顔は堪えたなぁ。それにみんなも一緒になって私を叱ってくるし……。でもそれだけ大切に想われてるってことだし、悪い気がしないのは内緒にしておこう。
「サーナイッ」
「チラッ」

「ご、ごめんなさい」
そうだよね、サーナイトはトレーナーの気持ちが分かるもんね。チラチーノはサーナイトの反応を見て気がついたのかな。相変わらず鋭いんだから。
「フィア？」
「なんでもないよー」
ニンフィアもずっと私から離れないし、本当愛されてるなぁ。
今、部屋にいるのは私の手持ち四体。
エースバーンとラティアスはお母さんと一緒に入院生活に必要なものを買いに行ってくれている。キュウコンは膝の上ですやすやだ。本当はチラーミィ軍団とかブリムオンたちも側にいたかったみたいだけど、そこまで大きな部屋はないからボールの中で我慢してもらっている。
みんなには本当に感謝している。もしかしたらあの時私はそのまま死んじゃってたかもしれないから。だから本当に――。
「ありがとう、みんな」
そういうと、みんな口々に応えてくれる。
でもね。

『画像』
>> グロくて草
>> 可愛くて草
>> 犯したい
>> 通報した
>> アフィ
>> ブーイ
>> イーブイニキ!?
>> 草
>> これがダンデを倒したチャンピオンのご尊顔ですか
>> てかポーズまんまオルガやん

>> マジやんw

パソコンて便利だね。知りたくなかった、こんな知識。どこを見ても私が白目を向いて血だらけで倒れてる画像ばっかだよぉ……。

あの時、みんな私を助けるためにすっごく頑張ってくれたんだ。頭を打った時は動かさないようにするなんていう、うる覚えの私が言ったことも実践してさ。チラーミィ軍団と一緒に周囲にいるかもしれない他のトレーナーたちに助けを求めに行ってくれたし、サーナイトたちも自分の力の限り応急処置してくれたし。本当にありがとう。

……命が助かったんだから、これくらいの代償は安いよね……。

「フィア」

ニンフィアが私の涙を拭ってくれた。

「……ぅ、ひぅ、……ぅぐ……」

泣き終わったら、携帯充電して電話しなきゃ。友達とか知り合いとかポケモンリーグ関係者とか、鬼のように連絡来てるだろうし。

気が重いなぁ。

第三話：目指せユウリ！　大いなる目標！

風が気持ちいなぁ。
こんな時間なのに外のビルはまだ明かりがついてるよ。
「ふふっ」
みんなはぐっすりだ。
もうママも家に帰ったし、やっと落ち着けたような気がする。
「大変だったなぁ……」
ポップくんには心配され、ビートくんには激昂され、マリィちゃんにはそれらに加え呆れられ……。他のみんなにもたくさんのお小言を頂いてしまった。
それに……。
「まだ痛いよね、そりゃ」
頭を包む包帯。この中の傷は一生ものではないものらしいがしばらく残るらしい。乙女の顔に傷跡なんて、ってママは悲しそうにしてたけど、あまり私は気にしてないな。引っ越す前は私は男の子に混じってかけっことか、外を駆け回ってたしね。うーん、気にする余裕がないだけかな？
あー、でもマリィちゃんとかはどうだろ。言うの忘れちゃってたけど、やっぱり残念そうにするのかな。反応が怖いなぁ……。

――それはもしかしたらウルトラホールが関わっているかもしれませんね。

「……」
それは医者に言われたことだ。違う世界の私。死んじゃったことだけは仄かして伝えたら返ってきた医者の考察。

――アローラ地方で目撃されることがある、所謂ワープホールです。詳しいことは未だ分かってはいないのですが、その穴は別世界、並行世界、未来、過去などに繋がっているのではないか、と言われて

いるんです。現に国際警察のリラという人はそのウルトラホールを通ってこの世界に来たようなんです。
……ただ、ウルトラホールを通った人のことを〝Ｆａｌｌ〟と呼んでいるのですが……ユウリさんは彼女たちとはかなり事情が異なっていますね……。
向こうではこちらの記憶が思い出せなかったのは共通していますが、それ以外が違い過ぎる……。
世界を行き来したことが原因なのか。はたまた別に原因があるのか。……他に思い当たるのは有名なシンオウ神話の空間と時間を司るパルキアとディアルガくらいでしょうか……。

「ウルトラホール……パルキア……ディアルガ……」
それらが本当に関係あるのか。あったとしてどうするのか。てかその二匹初耳なんだけど。
「う～～～～～!!!!!　わかんない!!!!」
「チラッ！」
「ひぃ！　ごめんなさいぃ……」
チラチーノは怒ると怖い、特に寝起きは。これは私たちにおける常識なのだ。
「はぁ……」
よく分からないことばっかりだ。
でも。
分かったこともあった。
私は自分で言うのもなんだけど欲張りだ。昔っから欲しいものは手に入れないと気が済まない困ったさんなのだ。チャンピオンになれたのもどうしてもなりたくて必死にみんなと修行したからだ。
けど、その我儘をこのまま通してもいいのだろうかと思うことも多々あった。十四歳なんだから、いい加減大人にならなくちゃいけないと。
――でもさ。
向こうの世界で生きて分かったんだ。

大事なのは自分に嘘をつかないこと。後悔をしない生き方をすることだって！

で、さっき私の考えは固まった。

みんながたくさんのことを話してくれたから、色んな方向から考えることができたよ。

私は――。

「――最強になるッ‼？」

「ヂラ〝ァア‼？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

まずはゆっくり休んで包帯とるよ！

ユウリは　けっしん　した！　▼